

慈濟

ものがたり

動き出した超高齢社会の生活

路地裏の長期ケア拠点 + 地域のリサイクルステーション





撮影・黄筱哲

● 扉の言葉 文・證嚴法師 訳・済運

この世に幸福をもたらす

生命を大切にして、愛の心を発揮し、
日々敬虔に、絶えず幸福をもたらしましょう。
菜食することによって命を守り、災害をなくせば、
万事が順調に進み、平穏で平和な世になるでしょう。



少子化と高齢化の波が世界を襲う中、台湾もまた、介護ニーズの増大という難易度の高い問題に直面している。多くの慈済会所が社会の趨勢に伴い長期ケア拠点を設置する中、台中東大静思堂では、高齢者たちがコーチの指導のもとに、中レベルの「筋力増強」運動を行っていた。(撮影・劉淑華)



慈済日本サイト

目次

【編集者の言葉】	物を大事にする 一目見て情が湧く	善耕／訳	4
【慈済のSDGs】	路地裏の長期ケアステーション＋地域のリサイクルステーション	御山凜／訳	8
	超高齢社会の暮らしに活力を！		
【この手で地球を守ろう】	古い物はトレンディ	葉美娥／訳	34
	台北中山八徳「惜福屋」のビフォーアフター		
	整理コンサルタントの楊雅琪さんにインタビュー	林欣怡／訳	48
	ため込まず、無駄にしない収納術		

【聞・思・修】	オーストラリアで	施燕芬／訳	53
	ちよつと違った慈済を見た		
【證嚴法師のお諭し】	愛と善は宝 情と愛も宝	慈願／訳	68
【世界に目を向ける】	マレーシア、台湾	善耕／訳	74
【グローバル慈善】	スペインの洪水被害	葉美娥／訳	80
	国を越えて復興を支援するボランティア		
【行脚の軌跡】	菩薩が安らぐ時	済運／訳	100
	慈済の出来事		
	10/18 11/23	済運／訳	106

物を大事にする 一目見て情が湧く

二カ月前の「行脚の軌跡」の中に、環境問題に関した特集があり、證嚴法師はこう開示していた。「大地は万物を生み出し、日用品の原料を製造し、人々の平穏な暮らしを支えています。人類は問題を起こしたり、破壊を生み出したりするのではなく、感謝の気持ちをもって地球環境を守らなければなりません。大地に感謝するには、物を愛し、大切にすべきで、『一目見て情が湧けば』、それを惜しむようになるのです」。

今月号の月刊誌『慈濟』では二人の記者が、台北市街地にある慈濟の「惜福屋」取材した。「惜福屋」とは、リサイクルした物や人々の寄付による衣類、書物、日用品などをボランティアが整理、分類して並べた場所のことである。訪れた人は物を選んで持ち帰ることができ、NPOや恵まれない家庭に寄贈することもできる。

慈濟の多くの環境保全教育センターにもこのような場所はあるが、「入荷」の予定が立たず、「出荷」も縁によるしかないため、往々にして、雑然と物が置かれた場所になってしまうことが多い。しかし、設計士の巧みな手腕と整理収納コンサルタントの指導のお陰で、慈濟中山八徳惜福屋は全く新しい姿に生まれ変わった。空間が与える「親近感」が倍増し、人々の中古品利用への意欲を高め、地域における「循環型経済」の模範の場になったと言える。

日用品は、リサイクルステーションを通して再生されることで、物の寿命

が延びるのである。これらの品物を整理するリサイクルボランティアは、福を惜しみながら福を修めており、奉仕する過程で自らの生命価値をも高めているのだ。

少子化と高齢化が進むにつれ、慈済ボランティアは高齢者の占める割合が非常に高く、中でもリサイクルボランティアの七割以上が六十五歳以上である。彼らは数十年一日の如く、リサイクルステーションで活動し、台湾全土に一万一千カ所以上あるリサイクルステーションや回収拠点を、コミュニティの長期ケアの場に変えた。つまり、老化や身体機能の喪失を効果的に遅らせることができる無料の長期介護が実践されていると言える。

今年、アメリカの中央情報局（CIA）が発表した二〇二四年度の世界の出生率を見ると、台湾は二百二十七の国と地域の中で最下位だった。一方、

台湾の人口で高齢者の占める割合が十四%から、今年は二十%に上昇する。たったの七年間だけで、世界で最も高齢化が早くなっているのだ。超高齢社会に突入した台湾では、「少子化」と「急速な高齢化」により、長期介護の需要問題が急速に浮かび上がっている。

国連の持続可能な開発目標（SDGs）における健康増進の中心的内容の一つは、高齢者の身体機能の喪失や認知症の発症を遅らせることにある。これは、慈済が台湾全土に設けた百二十五の地域ケア拠点で目指している方向でもある。フィジカルトレーニングや認知刺激、精神的なサポート及び環境に優しいボードゲームといった活動を通して、避けられない老化の過程をより健全なものにすることを目指している。

（慈済月刊七〇七期より）

路地裏の長期ケアステーション＋地域のリサイクルステーション

超高齢社会の暮らしに活力を！

少子化と高齢化の波は世界に衝撃を与えているが、台湾も介護ニーズの急増という難題に直面している。慈済はそのような時代の流れに合わせ、ナーシングホームやデイケアセンターを設立し、さらに各種長期ケア拠点を地域の会所やリサイクルステーションでも広く展開している。高齢者が生活機能を維持し、自分らしく、尊厳をもって老いを迎えるための支援体制を整え、国連の掲げるSDGsの「すべての人に健康と福祉を」を、着実に実践している。

文・葉子豪（月刊誌『慈済』執筆者） 撮影・蕭耀華（同月刊誌 撮影記者） 訳・御山凜

台

湾は今年「超高齢社会」の段階に突入した。六十五歳以上の人口全体に占める割合が二割を超えたが、これでも台湾はまだ、「最も高齢化した時期」ではないのだ。

国家発展委員会が発表した人口推計によると、二〇三九年、台湾の高齢者人口の割合は三割を突破し、二〇五九年には四割を超えるという。さらに、今は若年、壮年層の未婚、無子比率が高いため、将来高齢期を迎えた時には家族の介護に頼ることができないという問題に直面することになる。

今の高齢者と将来の高齢者を適切にケ

アするために、政府は二〇〇七年に「長期ケア十年計画（長照一・〇）」を展開し、二〇一七年には現行の介護施策である「長期ケア二・〇」を導入した。対象者を拡大しただけでなく、より重要なのは「ABC全域型介護モデル」を確立し、介護資源を三段階に分け、申請の受理からサービスの提供まで、できる限り、高齢者が慣れ親しんだ環境を離れることなく、支援を受けられるようにしたことがある。

約二十年にわたる施行と普及の結果、「長照」（長期ケア）は一般的な用語となったが、長期にわたって慈善、医療志

長期ケア ABC、一目でわかる

衛生福利部は、1つの郷鎮に1つのA級施設、1つの中学校学区に1つのB級施設、3つの村または里に1つのC級施設を設けることを目標として。

A 全域統合型サービスセンター

長期ケア専用ダイヤル 1966 を設置し、ニーズを検討して、サービスを手配する。

B 複合型サービスセンター

デイケア、リハビリ、ナーシングホーム、レスパイトサービス

C 街角長期ケアステーション

供食、運動、レクリエーション、身体機能低下の予防

ナーシングホームでは 機能回復が最優先

業を行ってきた慈済は、二十世紀の六〇年代という早い時期から、「他者に対する長期ケア」の志業を始めていた。

「慈済が最初に長期ケアを行った対象は、一九六六年に始めた個別案件の林曾（リン・ジン）お婆さんです」。慈済長期ケア推進センター副代表の莊淑婷（ツォン・スウティン）さんが詳しく話してくれた。当時八十歳を超えていた林曾お婆さんは、身寄りのない未亡人で、

自立した生活をするのができなかったため、衣食住と行動から最期の葬儀に至るまで、慈済がすべての世話をした。訪問ケア、医者への付き添いなど、初期の慈済ボランティアによる慈善活動は、現在の長期ケアサービスの内容とよく似ている。

医療志業が始まると、施設型の長期ケアサービスを徐々に展開した。一九九八年六月、花蓮慈済病院附属の「デイケアとナーシングホームが組み合わさった、軽安居」（安心して過ごせる施設）が正式にオープンした。これは慈済が初めて提供した施設型の長期ケア施設であり、

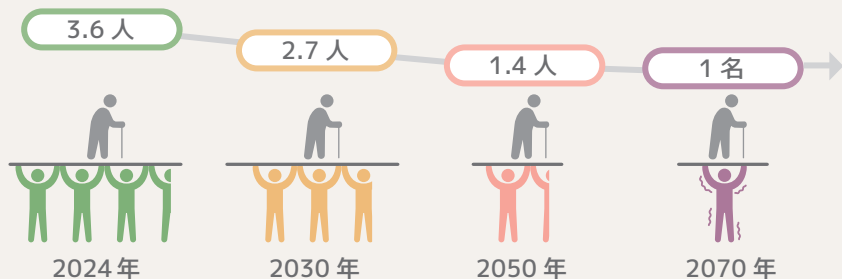


多くの慈済会所では、社会の趨勢に合わせて長期ケア拠点を設置している。高齢者は台中東大静思堂に来て、コーチの指導の下に、中レベルの運動と「筋肉づくりプログラム」を行っていた。（撮影・劉淑華）

生産者年齢と高齢者の人口比率

(資料提供：行政院国家發展委員會)

1 人の高齢者を支える青年と壮年の人口は
減少し続け、将来、彼らの負担はさらに重くなる。



台中清水静思堂前の木陰で、高齢者たちが歩行器を使ったり、車椅子に座った授業に参加して前進を目指す

社会のニーズにに応じて、宿泊型施設は不可欠であるが、より多くの高齢者をケアするためには、地域に密着した長期ケア拠点を広く設置する必要がある。政府が長期ケア二・〇施策を推進した後、慈濟基金会は二〇一八年に「長期ケア推進センター」を設立し、各県市で各レベルの長期ケア施設の設置を推進している。

現行法規に定められているB級施設に属する。二〇一四年には、台中市潭子区に宿泊可能な「台中慈濟ナースィングホーム」が設立された。

「寝たきり状態の高齢者が入所したら、より良いケアをして、歩いて退所できるようにします。また、車いすで入所した人には、毎日少なくとも数時間は立てるようにし、いつの日か自宅に戻って家族と共に幸せな時間を過ごせることを目指しています」。

莊さんの説明によると、従来のナースィングホームや養護施設のように、高齢者が最期まで住み続けるのは異なり、

慈濟のナースィングホームは、利用者の心身機能の回復に力を入れ、「自宅に戻る」ことを最高の理想と目標にしている。高齢者が退院して自宅に戻る前に、医療スタッフとボランティアが家庭訪問をし、居住環境の改善をサポートしたり、在宅ケア計画を立てたりすることで、高齢者が引き継いで安心して介護できるようにしている。また、嚥下や筋力のトレーニング、チューブ抜去訓練などの様々な健康促進訓練を行った結果、サービスを受けた高齢者の「自宅復帰率」は、五十％～六十％に達した。

りしていたが、移動する間も介護スタッ

フがそばで世話をしていた。「次はあなたが切る番よ!」と介護スタッフの陳碧玉(チェン・ビユー)さんが一人の男性利用者にハサミを手渡した。彼はアロマティカスを採取する動作をリハビリとして行っていた。その七十歳未満の男性は、慈済清水デイケアセンターに通っている三十数人の利用者の中では最も若い。脳卒中による片麻痺があったが、退院後に静思堂に来て、デイケアセンターの日々のプログラムと活動に参加してきたことで、体の状態は大き

く改善した。

台中の海沿いにある清水静思堂は、台湾全土のABC三段階の長期ケア資格を持つ十五の慈済会所の一つである。ここでは、毎週月曜日から金曜日まで、高齢者が「授業」を受けに来る。

「天気が良ければ、高齢者に日光浴しながら歩いてもらうこともあります。彼らも屋外で座っているのが好きなのです」。慈済清水総合長期介護施設の呂怡静(リュウ・イチン)主任が言った。高齢者に付き添う介護スタッフは常に注意力を保たなければならない。なぜなら、

デイケアセンターの利用者は身体機能がある程度衰えていたり、身体機能を喪失しているため、杖や歩行器、車椅子などの補助具に頼る必要があるからだ。また、食事の時には吞み込みの問題があるかどうかに注意を払う必要があるため、細心の注意と配慮が求められるスタッフが信頼されるのである。

七十四歳の紀さんは、両膝が変形して手術を受けた経験がある。子どもたちは普段、仕事をしているか子育てで忙しいため、毎週月曜から金曜の朝は、車で清水静思堂まで彼女を送り届け、同年

代の「クラスメート」と一緒に活動に参加し、午後三時か四時ごろに迎えに来て、帰宅している。慈済の長期ケアサービスに対して、紀さんはとても満足している。力を尽くす介護スタッフ、訪問介護員、ボランティアの多くは、いわば「他人の長期ケアを志願して行う人たち」なのである。

「證嚴法師は、『他人の長期ケアをする側に立ち、される側になつてはいけません』と私たちを励ましており、この言葉に深く感動しました。私の体はまだ大丈夫で、高齢者の付き添いができると



介護人員は、デイケアを受ける高齢者に付き添い、突発的な状況にも対応できるよう、慎重にケアしている。この仕事は、専門的な訓練を受けて初めて務まるのである。

思ったので、長期ケアの仕事に就きました」。介護スタッフの陳碧玉さんは、その仕事に参加する前は、すでに定年退職して暫く経っていたが、慈済ボランティアとして全力を注ぐようになった。二〇一八年、清水静思堂に長期ケア拠点が設立されると、訪問介護員や介護スタッフなどの専門人材が必要になったため、研修に申し込み、高齢者ケアの基本

的な技能、例えばベッドからの上げ下ろし、食事介助、経管栄養法などを学んだ。高齢者ケアには専門的な技能だけでなく、何よりも「心」が必要である。陳さんだけでなく、多くの地元の慈済ボランティアも介護スタッフや訪問介護員の研修に参加し、修了後は静思堂で定期的に活動する人もいれば、外勤で在宅サービスを提供している人もいる。ベテラン



ボランティアは、慈済に委託運営している台中市立仁愛長期ケア施設で、自分と同年代の高齢者と交流し、「他人を支える長期ケアを行い、他人に介護されない」という理想の老後を実践している。(撮影・張麗雲)

ボランティアの王衍基（ワン・イエンジー）さんは、訪問介護員の訪問ケアに同行することが多く、時には利用者の情緒が不安定な場合に対応することもある。他の法縁者と同様、長期ケアに関し

ては全力で協力している。「高齢の菩薩たちは、デイケアセンターに来て、初めは元気がないことが多かったのですが、主任やスタッフの励ましにより、今ではとても生き生きとしています。私た

ちはそれを見て感動し、支えていこうと思いました」。

慈済会所

地域密着型長期ケアステーション

また、清水静思堂には、地域密着型長期ケアステーションのスペースがあるが、デイケアセンターに比べて雰囲気はずっと活気にあふれている。利用者たちは自立した行動がとれるので、その多くは徒歩、バス、自転車で行って来る。八月の夏休み期間には、放課後教室を運営する慈済ボランティアが、教室の小学生

を連れてきて、お年寄りと共に「世代間交流による学習」を行う。

「はい、自分の席に座って！」と介護スタッフの蔡翠珍（ツアイ・ツウェイ・ジン）さんが慌ただしく秩序を整えた。おやつ作りの授業は終盤に差し掛かり、お年寄りも子どもたちも、自分たちが作った、餡にジンスー穀物パウダーを使ったサンドクッキーを味わった。

「皆、外部の団体が交流に来ると、格別に嬉しくなるのです。子どもたちを自分たちの孫のような目で見ます。そういう感じは特別なものです」。蔡さんは清水静思堂レベルCの地域密着型長期ケア

ステーションの概要を簡単に説明した。ここに来る高齢者たちは自立して生活できる能力があり、年齢は七十代から九十年代まで様々で、女性が八割以上を占めている。

「私の人生はここで色彩豊かになりました。みんなは『若返ったね』と言ってくれます。心が明るく楽しいと、人は若々しく見えるんですね！」「班長」を務める七十八歳の利用者、蔡秋霞（ツァイ・チュウシャ）さんが振り返った。十年前に屋台を店じまいして、正式に退職してから、丸二年間、家にこもっていた。八年前、清水静思堂で地域密着型長期ケ

アステーションが開設されると、彼女は再び晩年に輝きを取り戻した。

「ここに来るとたくさんのクラスメートがいて、一人が一言話すだけで三十もの言葉になります。私は『ゼンタングル』が一番好きで、それを描くと気分がとも明るくなるのです。水墨画にも興味があるので、少しずつ学んでいます。運動も大好きです」と蔡さんが言った。

デイケアセンターや老人ホームなど、要介護者や寝たきりの人のケアを重視する長期ケアレベルBに比べ、数が最も多く、広く分布しているレベルCの地域密着型長期ケアステーションは、予防に重



清水静思堂デイケアセンターの利用者が、慣れた手つきでアロマティカスを採取していた。枝葉は抽出してバルサムに加工できる。生産量は多くないが、作る過程で手と脳を活性化させ、小さな達成感が得られる。

点を置いていく。高齢者が健康な状態、または「準健康」な状態の時から参加して活動することで、身体機能の衰えを遅らせ、「不健康な余命」を短縮し、家庭や社会の長期ケアの負担を軽減することを目指すとしている。

高齢者が住まいの近くに外出し、社会的な交流を増やせるように、慈済の長期ケア系統は、台湾全土に百二十五の地域ケア拠点を設けている。これらの拠点は住いの近くにある慈済会所やリサイクルステーションにあり、同時に政府が推進する健康診断や運動などの予防的な健康

増進策と連携している。また蓄積されたビッグデータを活用することで、リスクの高い層を特定し、優先的に支援を行うことも可能である。

「台湾全土にある百以上の地域ケア拠点を運営してきて、高齢者は筋力や下肢の筋持久力が非常に不足していることが分かりました。そのため、今年はず十八の拠点から、サルコペニア（筋肉減少症）の普及スクリーニングを行い、『愛GO力 筋力増強プログラム』を展開します」と、慈済長期ケア推進センターの担当者、頼珈文（ライ・ジャーウエン）



さんが詳しく説明した。この半年間の活動は二〇二五年三月に始まり、約六百名の高齢者が「筋力づくりプログラム」に参加した。

参加者はまず事前測定で、体重、BMI、体脂肪率、筋肉量、握力などの運動データを記録する。その後、地域ケア拠点で週に最低一回、講師の指導の下に、スクワット、脚上げ、ペットボトルダンベルなどを使って、レジスタンストレー

ニングを行う。運動後には、ジンソー豆乳パウダーを溶かした飲み物を摂取してタンパク質を補給し、筋肉の修復と増大を促す。「高齢者は若者のように筋肉量を急速に増やすことはできませんが、できる限り現状の筋肉量を維持することが大切です」と述べた。

高齢の利用者たちは毎週コーチの指導の下に、中レベルの運動を行い、毎月定期的に体重、筋肉量、握力などのデータを測定する。半年間規則的に運動を続けた結果、多くの高齢者は体力の改善を実感している。

実は、慈済は長期ケア拠点で長

年にわたってフィットネス活動を推進しており、熱心なボランティアは自費で運動指導の訓練を受け、連絡所やリサイクルステーションに戻って、高齢者に教えている。「環境ボランティアにも、一週間に少なくとも一回、練習することは健康に良いと伝えていきます」。自費でフィットネスインストラクターの資格を取得したボランティアの董寿梅（ドン・スオウ

慈済清水デイケアセンターでは、園芸、音楽、運動など多彩な活動を提供しており、高齢者は家から出て授業に参加することを楽しんでいる。

メイ）さんは、トレーニング内容やレベルを高齢者に適したものに調整し、運動しに来るよう高齢者を励ましている。

認知症予防に

リサイクルステーションは効果的

サルコペニアから派生する身体的衰弱や身体機能の喪失だけでなく、認知症やうつ病も高齢者の生活に重大なリスクをもたらす。慈済長期ケア推進センターは、慈善、医療チームを統合して長期ケア拠点を設立し、地域社会の資源を有効活用して、認知症の予防と進行抑制を推進し

ている。

「国家衛生研究院の統計によると、二〇二四年の台湾の認知症人口は三十五万人で、高齢者人口の約八%を占めています。認知症の進行過程では、六十六%の人に精神行動的な症状が現れ、理由のない不安やパニック、うつ症状が現れます」と、台北慈済病院老年精神科の李嘉富（リー・ジャーフ）主任が、台湾の高齢者の認知症の概況を簡潔に説明した。

現在、認知症はまだ治癒できないが、幸いなことに、認知症の約四十五%は予防と遅延が可能である。「高齢者に視力

や聴力の問題が現れた場合は、眼鏡や補聴器を使用させ、視覚や聴覚をサポートすることが大切である。そうすることで、認知機能の低下を遅くすることができます。さらに、健康的な食生活と規則的な運動によって、体重・血圧・血糖値・血中脂質の四つを下げること、発症率を約十二%減らすことをできるのです」。

李主任は、個人でできる認知症予防のポイントをいくつか紹介している。外出して自分の能力を発揮することも、認知症予防やうつ状態の解消に効果的であると述べた。「数年前に国民健康署のウェブサイトで、『リサイクル活動に参加す

ることで、認知症の予防・進行遅延が可能』と書かれているのを見ました。それ以来、私はリサイクル活動を『社会的処方箋』と設計し、運動や認知機能の促進を組み込んで、慈済の拠点で実践しています」。

李主任は、七十歳を超えた慈済のリサイクルボランティアを観察するうちに、その多くが血圧・血糖・血中脂質の異常や慢性疾患を抱えているにもかかわらず、同年代の人よりもはるかに活力があることに気づいた。環境保全活動や他者への奉仕を通じて、運動と脳の活性化、人との交流を続けることができれば、自

慈済長期ケア資源は隣近所にある

五全サービス

全人：心身全体のケア

全家：家族全員を支援

全隊：スタッフ全員による支援

全程：全過程でフォロー

全コミュニティ：地域全体で見守る

地域拠点

48カ所の在宅ケア施設・デイケアセンター、**125**の地域拠点が、体力トレーニング、認知機能の刺激、心のサポートを提供。

筋力増強活動

18の拠点で「愛GO力 筋力増強プログラム」を推進。高齢者が運動を通じて筋力を増強化させ、機能低下の進行を遅らせている。

福祉用具のシェア

20のプラットフォーム、**135**の拠点によって、エコ福祉用具がより手軽に利用できるようになった。

スマート医療

89カ所の健康ケア小拠点で測定し、「880 健康管理・介護アプリ」にアップロードされた、血圧、血糖値、血中酸素濃度などの生理データは、遠隔モニタリングにより、急性重症化の予防を行っている。

慈済長期ケア推進センター



健康促進 老いても衰えない

立した生活機能を維持できるという。「介護にお金をかける必要がなく、毎月三萬元以上得をしたようなものです！」李主任は笑いながら、「ですから、慈済のリサイクルステーションは、最高のデイケアセンターと言えます」と言った。

国連の持続可能な開発目標に対応して、適切な健康増進と長期ケア施策は、高齢者の健康福祉を促進するだけでなく、介護のために仕事を失ったり、貧困に陥ったりする状況を減らすことにもつ

ながり、ますます貴重になる若年労働力が経済成長に投入できるようになる。慈済が台湾全土に立ち上げた長期ケア拠点と、地域ボランティアの専門能力の育成は、継続して健康ケア行動に取り組んでいる。これにより、前述の目標達成に貢献しているだけでなく、まず高齢者が身体機能を喪失せず、自身の良能を発揮して社会に貢献できるようにすることを目指している。

「ですから、慈済の長期ケアは、他人をケアするのであり、他人にケアしてもらうものではありません。ボランティアは社会資源を使わず、社会に貢献している



高齢者たちは、回収された資源の分別に集中し、一つ一つの動作で手と目の協調性を鍛えていた。さらに、人と頻繁に交流することも、認知機能の低下を遅らせることができる。このため、リサイクルステーションは「最高のデイケアセンター」と評されている。(撮影・黄筱哲)

のです」と、慈済基金会の顔博文（イエン・ポーウェン）執行長が改めて強調した。

未来を考えると、台湾の少子化と人口の高齢化は避けられないが、健康増進と適切な長期ケア施策を通じて、高齢期を「楽しい老後」に変え、高齢者の衰弱ス

ピードを緩め、人生で介護を受ける必要のある時期を短くし、地域で安心して老いてもらうことはできる。また、早めの準備と行動があつてこそ、未来の「老いても衰えない」人生を予見できるのだ。

（慈済月刊七〇七期より）

台北中山八徳「惜福屋」^①の ビフォーアフター

慈済台北中山八徳共修所にある「惜福屋」は、
リフォームにより溢れた中古品の陳列問題が解決され、
秩序ある美を醸し出した。環境保全と大衆の感情を結びつけた設計になっており、
「宝探して物を大切にしよう」というキャッチフレーズで多くの人を惹きつけ、
持続可能性の概念を目に見える形にしている。

文・周伝斌（月刊誌『慈済』執筆者） 撮影・蕭耀華（同月刊誌 撮影者） 訳・葉美娥

①「もったいない」を実践するリユースショップ

慈 済台北中山八徳共修所に行くと、
左側に変わった作りの扉があり、

その横にあるミントグリーン色の木の板
に白い「惜福屋」と書かれた看板がかっ
ている。そして扉の上には、円の中に交
差する数本の黒い線で「惜」の字をデザ
インしたロゴの下に、英語で「TREASURE
SPACE」と書かれており、扉をくぐると「宝
島」にきたことを意味している。

エアコンの冷気を逃さないようにする
ための透明なビニールカーテンの中に入
ると、柔らかい照明が白い壁を照らし、
正方高卓の上には上品な盆栽が置かれ、
壁に飾られた「惜福屋」のロゴが映えてい
た。故意に余白を設けたスタイリッシュ

でシンプルな雰囲気が、視覚的な快適さ
をもたらしてくれる。

「惜福屋」一階の左にあるカウンター
には、目を見張るばかりの装飾品が陳列
され、コの字の形に置かれた三つの古い
本棚には古本、CD、レコードなどが並
べられ、そして中央には木のパレットを
使って作られたテーブルと椅子が置か
れ、来客がそこに座って読書を楽しむこ
とができるようになっていた。そこは「惜
墨区」（文化を大切にすること）という
名がつけられている。二階には、古着を
展示した「惜衣区」と、中古日用品や電
気製品が陳列された「惜金区」がある。

「惜福屋」は二〇〇四年から運用が始

環境保全センターの物を 「惜福屋」に

だが、原則として大規模な改造をせず、空間設計と木工技術だけで、見違えるような効果を出すことに成功した。

「私たちは地球から資源を借用してい



まり、ほとんどの品物は慈済台北中山八徳共修所にある環境保全教育センターから提供されたものである。ボランティアたちの手によって整理・修理されたリサイクル品だが、中には新品同様の物もあり、棚に並べられた後、縁のある持ち主が見つかって、さらに長く使い続けてほしいという願いが込められている。かつて「惜福屋」は、古くて狭いという印象があつ

惜福屋に入ると、シンプルでスタイリッシュな光景に目を奪われる。白い壁の後ろは古本エリアで、本好きの人たちに静かな宝探しの空間を提供している。

ますが、使った後はどうやって地球に返したらいのでしょうか。環境保全と持続可能性とはこのことだと思えます」と「惜福屋」の改造を担当した Atelier A GI の創設者、李政宜（リー・ジンイー）さんはこう説明した。

改造工事は二〇二四年十月に始まった。この「中古品エリアの設計・改造プ

プロジェクト」は、環境部資源循環署の委託を受けて台湾設計研究所が行い、中古市場のイメージ向上と大衆が中古品を選ぶ意欲を高めることを目指し、より多くの若者を惹きつけて、若者と高齢者の双方に利益をもたらす環境を整備したいと考えた。中山八徳の惜福屋は、その模範拠点の一つに選ばれた。

ボランティアは、リサイクルステーションから選んで整理した衣類を「惜福屋」に持ってくる。以前は固定式ハンガーラックに分類して掛けていたが、その数が増えるにつれて場所が手狭になっていった（写真下 写真提供・李政宜）。改造した後、移動式で陳列したところ、移動が便利で、スペースの使い勝手がよくなった（写真右）。



設計と改造を経て、衣料品コーナーには七台の移動収納棚が設置され、様々な種類の衣料品が分類して掛けてあり、衣料品で溢れかえっているにもかかわらず、じつくりと選ぶスペースを確保している。収納棚にはキャスターが付いているので、移動がとても便利だ。スペースを有効に使えると同時に、高齢ボランティアへの配慮も感じられる。

「惜衣区」の窓際には長いテーブルとハイチェアが並んでいる。赤みがかったライトブラウン色のテーブルと椅子には、鉄パイプのハンガーレールが取り付けられてあり、インダストリアルな雰囲気

醸し出している。一番奥は「惜金区」で、食器やティーセット、おもちゃ、電気製品がそれぞれ異なった区域に置かれているが、同じような美しいスタイルで統一されている。白い陳列棚と木製フレーム、色と材質が空間の一貫性を保っている。

リフォームの後、若い世代の来客数が明らかに多くなった。今年九月の新学期が始まった頃に数日間当番をしたボランティアの張和倫（ヅアン・ホルン）さんは、「数日前、インド人の女子学生たちが入って来たのですが、それから間もなく、男子学生も来ました」と言った。張さんは、その男子学生たちは、先に来た

女子学生たちの紹介で来たのではないかと推測した。

二十年以上環境保全に尽力してきたボランティアの許武嵩（シュウ・ウーソン）さんによると、中山八徳共修所は、環境保全教育センターでもあり、人々の環境を愛護する心を啓発している。最善の方法は自分で実践することであり、たとえば多くの定年退職の年齢を超えたボランティアが、今でも毎日リサイクルセンターに来て、電気製品の仕分けや修理をしていることでも分かる。これらの努力は肯定されるべきだが、先ずセン

ばならない。

許さんは「惜福屋」のリフォームによる変化を気に入っている。「品物がきちんと陳列されていれば、人々はそれをもっと大切にしてくれるでしょう」と彼は言った。優れた空間設計と配慮された陳列は、人々の中古品に対する認識を変えることができる、李さんは例を挙げた。「日本人はあらゆる物には魂が宿っていると信じています。着たことがある服や使ったことがある物は、長い間役に立ち、お世話になったのですから、それらと別れを告げる時は、良い所にたどり着いてほしいと願うのです」。



う上に、人々から絶えず衣類や日用品が
寄付されるので、ボランティアが品物
の陳列や整理に対応するのは一層難し
くなった。

李さんがボランティアの問題を理解
し、ボランティアたちに収納知識を提供
するために、「収納する幸せ」チームの

「惜金区」の中古食器は、種類別にオープン
形式の陳列棚に並べられている（写真右）。

「惜衣区」には、有孔ボードがあり、回収が
された木の板、木製パレット、山形鋼、キャ
スターなどを使って整理、展示している。李
政宜さんは、「リサイクルステーションから
探してきて、環境保全に役立つようにしてい
ます」と言った（写真左）。



リフォームからメンテナンスまで

ボランティアと設計士チームは、同じ
理念を持っていたが、ビジョンが異なっ
ていた。双方は調整に時間がかかったが、
相互理解と尊重が必要とされた。

ボランティアの江旻真（ジャン・ミン
ジン）さんによると、「惜福屋」の秩序
を保つのは容易ではないそうだ。人々が
宝物を探しに来ると、展示されている衣
服や品物はどうしても散らかってしま
う。毎日在庫補充のボランティアが当
番をしているとはいえ、営利事業
のように専属スタッフがいるのとは違

責任者である楊雅琪（ヤン・ヤーチー）さんに、支援に来てもらった。最初は数回に分けて収納方法を教えるつもりだったが、後には長期的な協力関係に発展した。楊さんは中山八徳共修所の立地に目をつけ、指導に相応しい場所であることと、「惜福屋」も人々が収納を学ぶ理想的な場所であることに気が付いた。

現在「収納する幸せ」チームは、月に二回の収納実践クラスを開催している。人々に開放している他、定員五名でボランティアにも傍聴してもらっている。これによって、相互に良好な共善関係が築かれ、協力関係は一年近く続いている。

業種を越えた協力で 民衆に優しい外観を創出

「惜福屋」は、「収納する幸せ」チームに協力してもらうだけでなく、様々な方法で、コミュニティと連携している。例えば、「惜福屋」にある中古品を他の慈善団体に寄付したり、ホームレス拠点である「次は未来村駅」に中古の家電を提供したり、脳性麻痺の子供たちが手工芸を学べるように、「萱芸新知ケア協会」にデニムジーンズを寄付したりしている。

慈済中山八徳共修所では、二〇二五年一月より、フリーマーケットも数多く開

かれている。八月二十三日のフリーマーケットでは、ボランティアたちが電気製品、衣類、アクセサリーなどを提供したほか、美味しいベジタリアン料理も用意した。また、桃園県の青年ボランティアが構成するバンド「Easy Band」が、ポップソングや「大愛」ドラマのテーマソングを演奏したり、歌ったりして会場を盛り上げた。

フリーマーケットは小規模マーケットのようなもので、多くの高齢ボランティアにとっては懐かしい雰囲気がある。三十五年前、證嚴法師が「拍手する両手で環境保全をしましょう」と呼びかけた

時、ボランティアの陳松田（チェン・ソンティエン）さんと蕭秀珠（シヨウ・シユウヅウ）さんは、八徳市場前で回収資源の分別を始めた。すると、益々多くの人に参加するようになった。市場の隣に廃棄されていたトタン屋根の小屋が、二〇一六年に慈済中山八徳共修所となった。

時代の変化に伴い、八徳市場が取り壊され、会所のあるエリアも賑やかな場所へと変貌を遂げた。周りの建物は、斬新な住宅や観光ホテルに変わった。共修所も少なからぬ変化があった。例えば、セーターの雨除けテントをソーラーパネルとアクリル板に取り換えたことで、都会の

景観に配慮すると共に、省エネにも対応している。時代と環境は絶えず変化しており、長年リサイクルセンターを我が家としてきたボランティアたちは、日々の活動の変化にも常に適応していく必要がある。

現在の「惜福屋」の姿は、台湾設計研究所と Atelier AGI 設計事務所、廃棄物を再利用する「廃棄物の救世主」、及び慈済基金会の協力によってできたもので、一見偶然の産物のように見えるかもしれないが、歴史の過程における必然的な変化でもあるのだ。変わらないのは、その名称であり、「物を惜しむことは、即ち福を大切にすること」なのである。



(慈済月刊七〇七期より)

以前の実用的で控えめだった「惜福屋」は、少しずつ暗かった(写真左 写真提供・李政宣)。改造後、ロゴを通して理念を伝え、温かみのある照明にシンプルなデザインで、「宝探し」に優雅さと新鮮さを吹き込み、人々に入る楽しみを与えている(写真右)。



ため込まず、無駄にしない収納術



自分が使わない物を整理し、
それを必要としている人とシェアする。
このような循環の仕組みを通して、
モノが流れ続け、ムダにならないようにする。
これも、整理コンサルタント
「惜福屋^②」が目指している方向である。

文・周伝斌（月刊誌『慈濟』執筆者）

写真提供・楊雅琪（収納する幸せ・運営長） 訳・林欣怡

「整理には、正解はありません！」と
「収納する幸せ」の講師・劉佳穎

（リュウ・ジャーイン）さんは、目の前
の十人の受講者にそう語りかけた。整理

や収納の心得やテクニックを紹介・デイ
スカッションした後、一行は「惜福屋」
の「惜金区」と「惜衣区」で実践してみた。
「保温マグのような比較的よく使われ
る物は「ゴールデンゾーン」、つまり肩
の高さあたりに置くようにしています」。
黄さんは、惜福屋に来る人たちが最もよ
く手に取ると思われる品を、取りやすい
棚の位置に並べていると話す。そして、
日用品の棚に置かれていたおもちゃや野
球用品に対して、「このカテゴリーに入
らない物は、別のところに移します」と
言った。

講座をサポートした整理コンサルタン

トは、文具棚を整理しながら、「こうい
うソフトタイプのファイルは、一カ所に
集め、色ごとに分類すると見た目もきれ
いで、欲しい物が見つけやすくなります」
と言った。整理の過程では、物の特徴
や種類に基づいて分類するだけでなく、
実際に使う人の立場に立つて、どうす
れば取りやすくなるかを考えることも
大切だ。

二〇二五年六月から、「収納する幸せ」
は慈濟中山八徳共修所と協力して、毎月
二回、人々に整理実践クラスを開催して

②「もったいない」を実践するリユースショップ



いる。「ここほど実践的な場所は他にはありません」と、「収納する幸せ」運営長の楊雅琪（ヤン・ヤーチー）さんが言った。劉さんは、受講者を惜福屋に連れて行き、実際に手を動かすことで、疑問があれば、その場で質問でき、すぐ解決できると考えた。現在、「収納する幸せ」には劉さんのような講師が十数名おり、顧客のニーズは一般家庭における整理が一番多い。しかし、場所が変わったら、整理や収納に対する考え方も違ってくるのだろうか。

「ただ片づけたり収納したりするだけで、断捨離をしなければ、結局いらな

物をあちこちに移動させているだけと同じなのです。そんなことに時間を使う必要があるのでしょいか？ 先ず要らない物に家を出てもらうこと。そうして初めて、整理の時間を短くできるのです」と楊さんが言った。「断捨離と収納、この二つこそが、私たちの会社のコア・バリューなのです」。

この考え方は、惜福屋にも同じように当てはまる。古い商品がそのまま残っているのは、リサイクルステーションに次々と集まってくる中古品は棚に並ぶ機会を失い、結果としてモノの流れが滞ってしまうのだ。

楊さんはこう話す。「私たちとしては、お客様がコンサルタントに一度お願いするだけで、しばらくはその状態を維持できるようなことを望んでいます」。しかし惜福屋では、ボランティアたちが半分冗談まじりにこう言った。「コンサルタントの方が来た後は棚がきれいになるけど、一般に参観を開放したら一日で元通りです」。ボランティアの許武嵩（シュー・ウーソン）さんは笑いながら、

「収納する幸せ」の30数人の実習コンサルタントは、8月中旬に整理実践クラスに参加し、借金エリアで中古の食器を整理した。

（撮影・許雅玲）

「それもまた、毎日の修行だと思うしありません」と言った。

ワークショップの受講者はよく、惜福屋にある中古品の出どころに興味を持つ。この半年、慈済と関わってきた楊さんが代わって説明することもある。「これらは全て、地域の方々の寄付や、ボランティアがリサイクルステーションから回収して整理したものです。リサイクルステーションで良い物があれば、ボランティアは惜福屋に届けます。『収納する幸せ』のお客様が整理して余った物も、必要な人に送るよう勧めています」。

「収納する幸せ」チームは、「余った品

物」の情報をSNSに投稿し、オーダーした人が指定場所で受け取れるようにしている。品物はQRコードと説明が印刷された「縁結びの袋」に入っている。受け取った人は、将来同じ袋を使って不要の物を入れ、再びネットを通じて必要の人とシェアできる。こうして、物は動き続け、無駄になることはない。

慈済中山八徳共修所は、今回の惜福屋の改造で、さまざまな団体と協力する機会を得た。絶え間ないコミュニケーションと相互理解を通じて、共に持続可能性のために努力している！

（慈済月刊七〇七期より）

聞思修

文・李雅萍（大愛テレビの記者） 訳・施燕芬

オーストラリアで ちよつと違った慈済を見た

記者という仕事の最も魅力的なところは、広く善縁を結べることである。たとえ、それが人生の中の一瞬の出会いであっても、

取材相手は私に微笑みや言葉をかけてくれる。

今回オーストラリアを取材して、これまでのイメージを刷新し、希望が見えたと同時に、心の豊かさや喜びを感じた。

これまで證嚴法師の開示を聞く機会
は多くあったが、必ずしもその真
意を完全に理解できたわけではなく、ま

た長年にわたって、慈済人がよく使っ
きたおなじみの慈済用語も、私は何度も
繰り返し考え、確かめてから使えるよう

になった。二〇二五年二月二十八日から三月二日にかけて、オーストラリアで開催された「国際慈済人医会フォーラム」での取材は、私にとって「慈済人文素養のレベルアップ」とも言えるものであった。慈済ブリスベン連絡所の二階はその時、

将来的に医療費が払えない人々のケアをする「共同診療センター」にするために、リノベーション中だった。フォーラムの開催期間中、皆このような不便さを理解してくれたので、「同じ目標に向かっていく」という一体感と温もりを感じた。



今年の国際慈済人医フォーラムは、オーストラリアの慈済ブリスベン連絡所で開催され、オーストラリア全土のボランティアに準備を呼びかけた。慈済医療法人の林俊龍執行長（右端）が、国内外からの来賓に慈済の四重大業を紹介した。（撮影・李雅萍）

ある日、ニュースの原稿を書き終え、お茶を入れようと席を立った時、偶然に二階の狭い通路で見かけたことがあった。それは数名のベテラン慈済ボランティアたちが同じ方向を見つめて満ち足りた、そして誇らしげな表情を浮かべていたことだった。その視線の先を追っていくと、慈済医療法人の林俊龍（リン・ジュンロン）執行長が、オーストラリアの慈済人医会メンバーを集めて、彼らのフォーラムは大成功だったと賞賛しているところだった。

彼らは大学時代から慈済に関わって

ア慈済人の共通の思いを読み取ることは難しくなかった。従って、年長者は栄光のバトンを次世代に渡し、静かに舞台裏で見守り、彼らの活躍を喜ぶだけでいいのだ。慈済オーストラリア人医会の活気ある姿に、印象を刷新した私も、希望が溢れているのを感じた。

台湾で慈済人医会メンバーに同行しての山奥での定期施療や、寒波襲来時に都会の暗闇にいるホームレスのケアを取材するといったことは、記者にとっては日常茶飯事である。そこで出会った医師の多くは中高年で、診療経験が豊富である

きた慈青（慈済青年ボランティア）の先輩たちである。オーストラリアならではといった明るいスタイルで後輩たちをリードし、喜んで奉仕した姿からは、溢れんばかりのエネルギーが伝わってきた。「It's really, really a gift -（これは本当に、かけがえのない贈り物です）」という林執行長のその言葉で、彼は慈済オーストラリアの将来に、希望が満ちていることを感じたに違いないと私は確信した。

「若い世代が成長し、慈済の使命も担えるようになった」という、これらシニ

上に、施療対象とは旧知の仲であるが、また余りにも熟知しているため、お互いのやり取りは水のように淡々としていて、記者の目線からは、何というか、火花のようなものに欠けていた。

しかし、今回のブリスベン取材では、出会った慈済の医師たちが皆、私より若かった。彼らはブリスベン、シドニー、メルボルン、パースなどに在住している。皆、社会のエリートでありながらとても謙虚で礼儀正しく、慈済の志業をしつかりと受け継ぎ、オーストラリアの多様かつ開かれたスタイルで新しい知識を融合

させている。そんな彼らの姿に、喜びを感じないわけではない。

慈青というゆりかごから 慈済大家族へ

「この家は好きに使っていいのよ。寝たい時は寝袋持ってきたらいいし、三、四十人でもカーペットなら寝られるわ。キッチンや冷蔵庫にある物は何でも食べていいのよ。お金は取らないから」。台湾南部出身の情熱的な蘇鄭淑芬（スウ・ジンスウ・フェン）さんが優しく朗らかに言った。

外に対してはNPO団体を招いて共に善行をし、さらに地元の行政ともスムーズな連携ルートを築き上げ、慈済の影響力を高めている。このような世代継承は、正しく「青は藍より出でて藍より青し」という言葉を体現しており、偽りのない真心の表れであると感じた。

災害支援には智慧が必要であり、善行にも方法がなくてはならない。台湾とは異なるオーストラリアの社会において、慈済ボランティアたちは、毎回の活動で良い評判を蓄積し、政府や大衆の信頼を獲得してきた。「私はこれまで多くの国に赴任してきましたが、駐在国で災害が

彼女の夫、蘇琪明（スウ・チーミン）さんは、慈済ブリスベンの元責任者で、彼らの住まいは超大型の下宿のようなところで、ブリスベンで勉強する慈済の大学生たちは、殆どそこに来たことがある。次世代の慈青たちをブリスベンで育む「ゆりかご」と言っても過言ではない。

「親は子の手本。私たち年長者は慈青たちの手本なのです。私たちの接し方によって、将来は彼らが次の世代に接する態度が決まります」。蘇琪明さんは嬉しそうに言った。

今回のフォーラムを主に担ったのは、慈青の先輩たちである。内では団結し、

起きた時、必ず、真っ先に被災地に駆けつけるのが慈済人でした。被災者に寄り添い、心を癒す支援をし、それに、私たちは在外公館の外交業務も支援してくれました」。駐ブリスベン台北経済文化事務所の范厚祿（ファン・ホウル）所長は、インタビュを受けた時、「ナンバーワン」というジェスチャーをして、目を輝かせて語った。

私が初めてオーストラリアを訪れた時、五十年に一度と言われるサイクロン・アルフレッドに遭遇した。台湾はよく台風に襲われるが、オーストラリアに上陸するサイクロンは、多くはない。「サン

シャイン・キャピタル（陽光之都）」とも呼ばれるのがブリスベンである。しかし、そのお陰で私は、慈済ボランティアの迅速な対応動員力を記録することができた。小さいながらも素晴らしいブリスベンの慈済連絡所が、地域住民に安心と

安全を与える避難所になったことを、目の当たりにしたのだ。

この連絡所は、これまで見てきた中で、最も既成の枠を打ち破った慈済の建物だと言える。現地の建築基準に則って、高すぎず、周囲の住宅と調和が取



フォーラムの歯科ワークショップでは、各国からの参加者が現場で低侵襲修復技術を練習していた。（写真提供・オーストラリア・ブリスベン連絡所）

れている上、慈済の特色を取り入れながら多目的な活動ができる空間にしている一方で、オーストラリア社会が重視する公衆ニーズにも配慮している。「入り口から天井のカーブ、両サイドの大きな壁、そして開放的なエリアのガラスデザインからは、この空間が人々を導き、歓迎しているような印象を受けます。まるで、我々が同じ船に乗っているような感覚になるのです。慈済のロゴの一つにあるように」。建築士のジョン・ネイラン氏が語った。

ブリスベン連絡所に入ると、小規模だがジンスーブックカフェがあり、窓辺に

座ってコーヒーを楽しむことができる。さらに進むと、「感恩堂（かんおんどう）」があり、そこは慈善活動の中心となる場所である。二階には「合同診療センター」が計画され、医療関係を重点に置いている。三階は「大愛幼稚園」で、広々としたテラスからは空が見え、木に触れることができる。子どもたちは日光の降り注ぐ中で元気いっぱい走り回っている。

この幼稚園では先生も子どもたちも全員が制服を着用しているというのが、オーストラリアでは稀な光景である。「制服を着る目的は、比較する心を抑えるためです。私たちは大家族であり、子ども

たちも入園して帰属感を感じるはずです」。園長の林華妍（リン・フワイエン）さんが語った。「オーストラリアは多文化で多民族国家なので、幼児教育の段階から他の文化を尊重することを教えています」。慈済の理念である「感謝・尊敬・愛」は、現地の教育カリキュラムとも完全に一致している。正しい価値観であれば、世界中に遍く通用するのである。

今も続いているストーリー
「一つから無量が生まれる」

オーストラリアの国土面積は世界で

六番目に大きく、豊かな天然資源を有し、リゾート大国としても知られているが、人口は二〇二四年になってようやく二千七百万人を超えたばかりである。広大な土地に対して人口は少なく、新たな移民が主な人口増加の源である。慈済志業のオーストラリアにおける発展も移民の歩みと関係している。

一九九〇年、子どもの教育環境を考えた呉照峰（ウー・ツァオフォン）さんは、台湾からオーストラリアに移住した。彼女は、師匠である證嚴法師からのお諭しを心に銘記した。「その国の空の下と大地の上に住むならば、その社会を利し、



今回のフォーラム開会式の時、シスター・アンジェラ（左）の100歳の誕生日を皆で祝福し、30年以上にわたる慈済への支援に感謝の意を表した。（写真提供・オーストラリア・ブリスベン連絡所）

現地に恩返しすることを理解しなければなりません」。その時、彼女は三十八歳で、「当時は英語がほとんど話せませんでした。だが、ベストを尽くしました」。

ブリスベンにあるマター病院に行く
と、彼女は、ボランティアをしたいと自ら申し出た。それは、オーストラリアにおける彼女の最初の一步で、「一つから無量が生まれる」の始まりでもあった。

三十五年前、マター病院の院長を務めていたシスター・アンジェラは、呉さんの善意を観察し、確信し、それから慈済をより深く知りたいと思った。その後、何回か台湾を訪れて、證嚴法師に会った。

宗教家として、お二人はカトリック教と仏教という異なる宗教に属していても、人道支援に対する志は一致しており、お互いに相手を生涯の親友とみなした。

今回のフォーラム開会式で、ボランティア
アたちがシスター・アンジェラの百歳の誕生日を祝う計画を立てていると聞いた私は、出発前に彼女に関する資料と映像を調べた。アイルランド出身でありながら、生涯をオーストラリアに捧げた彼女には敬服するばかりで、直接取材できる縁を格別に大切にしたい。シスター・アンジェラは耳がよく聞こえ、実年齢と不釣り合いなくらいだった。これこそ「愛が

あれば、老いは寄りつかない」という証だと思った。

インタビュの時に、ちょっとした出来事があった。二階で改装工事をしていて空調の排水音が大きかったのだ。皆が静かにシスターの言葉に耳を傾けていた時、その排水音はまるで川の流れるように響いた。その数秒間、私は心の中で二つのシナリオを思い浮かべた。「一つは、このインタビュを中断すべきだが、失礼になるのでは……。もう一つは、成敗の運命をマイクの集音に任せてみようか？一縷の望みがあるかもしれない」。結果として、話を止めたのはシスター・

アンジェラの方だった。「私の後ろに流れる川の音は、あなたのインタビュを台無しにしてしまうかもしれないわね」と。その場にいた全員が彼女のユーモアに思わず笑ってしまった。優雅で親しみやすいシスターに取材できたことを、私たちは心から光榮に思った。

呉さんにとって、證嚴法師は「智慧の母」であり、シスター・アンジェラは「英語の先生」であった。当初、呉さんは英語がほとんど話せなかったが、今はステージに立って、英語で慈済の理念を語れるようにまでなった。長年、シスター・アンジェラはオーストラリア国内での人

脈を活かして、慈済の活動が他の都市へ一歩ずつ広げて行く手助けをした。それに加えて、慈済ボランティアたちが誠実に地道な努力を積んで来たため、今ではシドニー、メルボルン、ブリスベン、パース、ゴールドコースト、アデレードなどのオーストラリアの六大都市に慈済の連絡所があり、前述の四都市には「慈済人医会」が愛の足跡を残している。

長く記者の仕事が続けていると、「長年、頑なに続けてこられた原動力は何ですか？」とよく聞かれる。私は、最前線取材する魅力というのは、広く善縁を結べることだと思う。たとえそれが人生

の中の一瞬の出会いであっても、取材相手のちょっとした笑顔や何気ないひと言があるだけでも、または、私がただの傍観者であったとしても、である。元来はプロの中立的な立場でいようとしていたのが、思いがけず、感動を覚え、心に自ずと力が湧き出て、続けて頑張る能力が啓発されるのだ。

そして、私は證嚴法師が引用した仏典の言葉、「我が門に入る者は貧しからず」を、ふと思いついた。私はまだ富める者にはなっていないが、心の豊かさでは、大愛テレビ局の取材で、「我が門に入る者は貧しからず」を体得している。

愛と善は宝 情と愛も宝

この度の、花蓮光復郷で行われた救済活動を見て、台湾は宝島だという事を実感しました。

愛と善を宝とし、情と愛を宝にしていました。

情は覺有情、菩薩の情であり、

愛は広い心で以って、人を区別することはありません。

今

回の花蓮光復郷の被災状況は、
「危うき国土 人生無常」と言え

るほどです。その時目にした台湾社会はとても美しく、誠実に溢れてい

ました。

台風18号（ラガサ）のもたらした雨量により、山の上にある堰き止め湖から水が流れ出し、その勢いで橋を押し流し、土砂が民家にまで押し寄せ、家々は泥で溢れかえりました。身寄りがないか、病気のお年寄り、若い世代は仕事で都会に行っている、大変苦労しています。こういう時にこそ人々の發揮する力が必要で、その愛が東部へ押し寄せました。

一旦災害が起きると、四方からこぞって支援に駆け付け、光復駅は中年や高

齢者、それ以上に若い、県外のボランティアで溢れ、皆雨靴を履き、手にシャベルを持っていました。これほど人数が多くなっても、皆誠意をもって奉仕に来ており、秩序を保って騒がしさはなく、駅を出ると直ちに整列し、清掃に行く準備が整っていました。

以前から、花蓮の土はねばねばしていると言われていました。今回シャベルを持って泥を掬ってみると、言葉にとどまらない感触を体感しました。水飴のような粘りによって、シャベルで掬いあげるのがとても困難なのです。

また、足を踏み入れると、雨靴を抜くのも容易ではなく、後の人の手伝いで、やつと泥から抜け出られるのです。

皆さんは体が疲れても、道理にかなっているので、心は安らかでした。ここで力を出せることが嬉しかったのです。突然こんなに多くの人が光復郷に現れ、お互いに面識が無くても家の中に入ってもらって一緒に掃除をし、終わったからお互いに取りがとうと言っています。光復郷を離れる前、雨靴を洗ってくださいるボランティアもいて、慈済の弁当はともおいしかったと言って、喜びに満

ちた気持ちで帰って行きました。

愛に満ちた人々が、着くべき位置に着いていたことにも感動させられました。更に感動したのは、『合』と『和』が融合した美しさと、心と心、手に手を取った繋がりによって、力が大きくなったことです。台湾は真に宝島であり、愛と善を以て宝とし、情と愛も宝としています。その情は覚有情であり、菩薩の情なのです。愛とは広々とした、分け隔てがなく、お互いの真心からの誠意と慰撫なのです。どこかで助けを求める声を聴けば、速やかに動員して

くれるのです。

突如発生した洪水で、人々は緊張と落胆、苦しみに喘ぎ、慈済人は近寄って抱擁し、彼らに肩を貸すことで、パニックの受け皿になりました。救難救助の段階はほとんど終わり、次は彼らの生活に対するケアの段階で、慈済慈善活動の常態に戻って長期ケアを必要とする人たちに奉仕する必要があります。以前は問題が見えず、支援を必要とする人を見つけられなかったかもしれませんが、今回、家庭訪問を行ったことで問題が見えたからには、やるべきことを

しっかりとやらなければなりません。

衆生の苦難を見るに忍びない気持ちがあるが仏心であり、苦難を取り除くことを実践するのが、菩薩道を歩むことなのです。仏心を啓発すれば、力は無量です。菩薩道を歩むことは困難ではありませんが、因縁を逃してはなりません。慈善は世に広めるべきであり、歩みを止めてはならず、自在に遠くまで歩むには、見返りを求めない精神を持つことが大切です。大愛に限りはなく、仏陀が私たちに下さった「慈、悲、喜、捨」の精神をもって、天下の善事を行

うのです。私たちは奉仕する責任があり、同じような広い心をもって天下の人々のために実践しましょう。

人々のために奉仕するのは、一人ではできませんから、多くの人が集まって行えば、かなり楽になります。でも、一緒に行動する人がいても、お互いに感謝し合わなければなりません。感謝の言葉一つで、心が安らぎ楽しくなり、恩に報いる最良の方法でもあるのです。

毎日ニュースを見てみると、世界も四大不調にあることがわかります。これほど広い世界には、苦難にある人が

たくさんいます。一方で、贅沢な暮らしや、ぼんやりと日々を過ごしている人も少なくなく、その差は大きいのです。私たちは、人間（じんかん）の無常を理解し、衆生の苦を体得し、知ることから

悟るようにならないといけないかもしれませんが、大我の精神を発揮して、世の人に関心を寄せてこそ、悟りと言えるのです。

時は飛ぶように過ぎて止まることは無く、人生は僅か数十年で

す。「樂をしてから修行しますので待ってください」と言える時間がどれだけある

のでしょうか？それに、いつになったら樂をすることが終わるのでしょうか？ですから、今この時に感謝しなければなりません。平穩な日々感謝し、足りない生活に感謝はしても、人間（じんかん）に恩返しをしたでしょうか？直ちに人を利することをするのが、私たちの本分なのです。

台湾にこれほど多くの愛のある人がいることは、とても喜ばしいことです。この愛は実に温かく、温和です。光復郷に來た皆さんは、誰もが深く記憶に残ると思います。たとえば光復郷

に行つてなくても、テレビやインターネットで見で、感じる事ができます。全ての善行が円満に終わったことを、皆さんに感謝します。そして、敬虔に皆さんを祝福し、好事と良い人が共に集い、天下を庇護し、愛が人間（じんかん）において、永遠に伝承されることを願っております。（慈濟月刊七〇八期より）



マレーシア

資料の提供・柳慧晶、李智傑、李麗心、江欣燕
訳・善耕

環境保全三十年目

八千人がジョギングしながらゴミ拾い

慈済マレーシア支部の環境保全志業は三十周年を迎えた。セランゴール地域だけで七十一のリサイクルステーションと二百四十八の回収拠点を有するようになった。二〇二四年からは、参加者がジョギングしながらゴミ拾いをするという北欧で始まった活動「プロギング」



が開催されている。二〇二五年は八千人以上が参加し、六月二十九日のイベント当日、メイン会場のクアラルンプール静思堂を出発した（前ページの写真）。そしてパハン州、サバ州、サラワク州など五十二の地点でも同時に開催された。大規模な提唱活動を通して、さまざまな組織やコミュニティに影響を与え、手を取り合っ

て地球を守ろうとしている。

台湾

文・陳秋華 訳・善耕
撮影・江寶清

日曜日に 台北駅に集まる 外国人労働者の 健康管理

外国人労働者に対する健康ケア活動が、台北駅で行われている。歯科、中医科、内科、産婦人科、皮膚科など百名以上の医療スタッフがサービスを提





供している（左の写真）。初めて心臓エコー検査と神経内科が追加され、外国籍ボランティアが駅の各エリアで同郷の人たちに参加を呼びかけていた（前ページの写真）。

多くの外国人労働者は、高齢者の介護をしたり、建設現場や工場で働いたりしており、勤務時間中に医者にかかることが難しい。慈済基金会と慈済人医会は年に三、四回、台北市労働力重建運用処と協力して、無料の健康相談を行っている。六月二十九日の日曜日は、延べ九百四人が訪れた。（慈済月刊七〇五期より）



洪水が引いた後、復旧工事が始まった。ベネトゥッセルの一部の道路が泥で覆われ、水に浸かって転覆した車が道端で撤去を待っていた。(写真提供・ペロニカ・チャパロ・ソルノサ)

スペインの洪水被害

整理・編集部 訳・葉美娥

国を越えて 復興を支援するボランティア

稀に見る暴風雨により、この三十年間で最も致命的な洪水被害を被ったスペインの古都バレンシア。多くの地域では、半年が過ぎても復旧には程遠い状態が続いていた。十の国と地域から来た慈済ボランティアが被災地に集合し、再建に協力した。

南

欧スペインの東部で、二〇二四年十月下旬に致命的とも言える洪水

が発生し、災害をもたらした。一部の地域では、短時間に一年分に相当する雨が降って河川が氾濫し、瞬く間に住宅地区や交通の要衝が冠水した。犠牲者の数は二百人を超え、その中には避難が間に合わなかった高齢者も少なからずいた。

バレンシア州の被害が最も深刻だった。ヨーロッパの慈済ボランティアは、現地調査を一度、再確認を六度実施し、地元政府機関を通じて被災者名簿をまとめ、二〇二五年の七月九日から七日間、三千世帯以上に買い物カードを配付した。

されたリストをもとに、家庭訪問して再調査した。

配付活動は教会や政府の文化センターで行われた。配付した買い物カードは、大手スーパーチェーンのメルカドーナと連携しており、店内の新鮮な野菜、果物から保存の効く非常食、生活用品まで様々なものを買うことができる。

買い物カードを受け取った三千世帯あまりのうち、半数はピカーニャに住んでいる。現地の人口約一万二千人のうち、千七百世帯の約五千人が被害を受け、そのうちの八十世帯は自宅での生活が不可能となり、政府が確保した安全な場所へ

洪水が引いた後に残る傷跡

慈済ボランティアは、アルティウス基金会、カリタス基金会、地元政府機関と協力して、被害状況の調査と配付を行った。アルティウス基金会は、災害発生後、緊急救援活動を開始し、今なお被災世帯からの支援要請を受けて、家具などの物資を提供している。彼らの作成した資料はとても詳細にわたっていて、被害の程度や住実の有無に基づいて、支援リストに含めるかどうかを総合的に判断し、必要がある時は家庭訪問して確認した。慈済ボランティアは、彼らから提供

移動した。

五月中旬、ロサリオ・ゴンザレス第一副市長自らが案内役となり、慈済ボランティアの現地視察が行われた。市内を貫く一本の河川には五つの大きな橋が架かっており、そのすべてが洪水で流されていた。政府は交通を復旧させるために仮設の橋を造ったが、作業員は今なお川の清掃作業を続けている。

川の兩岸の家屋は、高さ一、二メートルに達した洪水で大きな被害を受け、廃墟のようになっていた。川沿いにある主要な教会は、数カ月の修復工事を経てようやく再開された。社会局のエミリア局

ポランテアは2025年1月21日から24日にかけて現地視察を行った。
チバ市の川辺には、洪水と土砂災害の傷跡がまだ残っていた。（撮影・主慧貞）



長によると、二〇二四年十月二十九日に洪水被害が発生した後、十一月二日に緊急対応センターを設立し、被災者が災害状況やニーズを登録できるようにして、政府と赤十字社が共同で補助金を支給した。また、五十世帯あまりが家電を受け取っていないか、物資が不足しているとの資料が示された。そして、水位は高くなかったが、住民のほとんどが一人暮らしの高齢者だという地域もあった。

その後、アルティウス基金会のボランティアも慈済ボランティアに同行し、再度被災地を訪問した。いくつかの町村の被害状況はほぼ同様で、廃墟或いは改修

工事のため居住不可能になっていたが、室内の家具の大部分は慈善団体から寄付されたものだった。ピカーニャという町に三十五年間も住んでいるマリアさんの家は川沿いにあつて、洪水が来た時は家族で二階に逃げたが、ご主人は重要な書類を取りに戻り、予期せず水流され、十五日後自宅の近くで、遺体で見えられた。

あるお婆さんはボランティアにこう話した。災害はこの町の住民に大きな打撃を与え、誰もが呆然としていたが、長い時間をかけて少しずつトラウマから立ち直ることが出来たそうだ。或る人は、幸

いに二階があつて、避難できたが、暫く経つても、当時の助けを求める声が聞こえ、そしてその声が消える瞬間がまだ脳裡に残っているという。

古い家に住むお年寄り 言葉にならない苦しみ

ウティエルという町は、十月二十九日の午前から雨が降り始め、その後、堤防が決壊し、建物の中に水が流れ込んだ。水は高さ二メートルにまで達し、二十四時間後にやっと引いたが、深刻な被害をもたらした。家によっては、洪水で壁が

損傷し、今も時折水が染み出てきて、天井には白華現象が現れていた。
ポヨ溪谷沿いの大きな被害を受けたカタルーニャでは、洪水が山から流れてきて水の都になつてしまった。カリタス基金会のスタッフが慈済ボランティアに同行して家庭訪問を行った。七十三歳のゼセンタ・ファナ・ユサ・シスカンさんは、洪水が襲つてきた時は一人で家にいたが、水があつという間に腰まで達したので、事態の深刻さを悟って、慌ててテーブルの上が上がって立った。しかし水位は首まで上がり続け、停電して暗闇となった中で、救助が来るまで四時間も待った。

右手で杖を突いていた行動の不自由な
フアナ・パコモさんは、家から逃げた時、
隣人が投げたシーツを掴んだことで、洪
水に流されなくて済んだが、浮き沈みし
ているうちに、亡くなった隣人の遺体が
目の前を漂っていくのを見た、という。
災害の後、彼女の三歳の孫がシャワーを

浴びる時、水の音を聞いたたびに、「やめ
て！」と泣き叫んだ。
この地域で被災した人の多くがお年寄
りで、歴史のある古民家に住んでいる。
しかし、一旦洪水によって破壊されると、
再建する能力がない。慈善団体からの補
助金は焼け石に水である。幸いにして生



4月12日、ボランティアはウティエル市政府とカリタス基金会から提供された被災者名簿をもとに、家庭訪問を行った。浸水が深刻な地域では、多くの家屋はすでに危険と判定されて床と壁が撤去されていた。
(撮影・梁欣伶)

き残っても、家族を失った後、壊れた家で一人、その苦しみに向き合わなければならなかった。ボランティアたちは相手の身になって、静かにお年寄りたちの話に耳を傾けた後、温かくハグした。

悲しみを拭い去り

扇状に広がった縁

フランス、イギリス、ドイツ、ポーランドから来たボランティアは、チームを組んで被災状況の調査と再確認をするため、政府機関と施設を尋ねた。一月、三

月、四月、五月には、それぞれ異なった被災地を訪れて、適切な配付場所を探した。六月もポヨ溪谷沿いのもう一つの甚大被災地、パイポルタで臨時オフィスを借りて、配付の準備を行った。

災害後のパイポルタは、道が泥だらけになり、電気、水道、ガスの供給も停まって麻痺状態に陥っていた。慈済の臨時事務所の近隣住民は、ボランティア活動があることを知ると、頻繁にやって来て挨拶したり、慈済のことを聞いたりすると共に、よく野菜や果物、ケーキを持ってきた。そのうちに、ボランティア

のベストを着て定期的に手伝いに来る人が増えていった。リディアさんは、慈済ボランティアたちが自費で様々な国から来ていることを知ると、ほぼ毎日事務所に来て事務の手伝いをしたり、被災者と電話連絡を取ったりした。「苦しんでいる人、すべてを失った人がこんなにたくさんいるのです。電話をかけるのは小さなことです。私も役に立ちたいと思うのです。それに、多くの慈済人が遠くから支援に来てくれたのを見て、私も何らかの力を出して行動すべきだという心の声が聞こえたのです」。

仮設事務所では「愛の扇を広げて善行する（扇と善の字の中国語の発音は同じ）活動を催した。配付活動の時のプレゼントにするために、扇子にいろいろな絵を住民に描いてもらった。住民たちが絵に集中できれば、心が落ち着き、ストレスも軽減されるだろうと考えたのだ。一部の人は帰る前に、人助けのために、と竹筒募金箱に小銭を入れるのを忘れなかった。何人かのお年寄りは、毎日来て、平均三時間も描き続け、中には家に持ち帰って描く人もいた。彼らは二千枚の扇子を完成させることを誓った。扇子が広



がるように善の縁を結ぶことができれば、それはとても意義深いことだからだ。
 六つの町村で七回の配付活動を行うには、多くの人手が必要だった。言語と文化の違いがあるため、中華系が主な慈済ボランティアについて、多くの住民はよく知らないことから、電話をしても詐欺だと間違われ、すぐに切られることも少なくなかった。そのため、スペイン語、英語、中国語を話せる地元住民を募集することが非常に重要になった。六月三日、慈済はパイポルタで最初のボランティア募集説明会を開いた。地元中華料理店オーナーである鄭小玲（ジン・シャオ

リン）さんが、無償で営業していない午後の時間帯にスペースを提供してくれた。「人は生活のためだけに生きるのではなく、誰かを助けるために最善を尽くすべきです。これこそが生きている意味なのです」と彼女は言った。鄭さんはいつも、ボランティアのために昼食を作り、一味違った美味しい菜食料理を提供してくれた。この親切な心遣いは、半年間、被災地を頻繁に往来していたヨーロッパ

被災した当時を振り返ったある女性は、真っ先に頭に浮かんだのは、アルバムを救うことだった、という。結婚式で母が化粧してくれた事から出産、子育てまで、家族の良い思い出が詰まったアルバムだからだ。（撮影・梁欣伶）

のボランティアたちの心を落ち着かせた。

六月下旬からは、様々な町の被災世帯に配付活動の知らせを届ける作業を始めた。ピカーニヤのエミリア社会局長も地域ボランティアを連れて、十本のルートに分かれて各世帯に届けた。

宗教を超え、

円満に終えた配付活動

スペイン、イギリス、ドイツ、フランス、オランダ、ポーランド、イタリア、スイス、台湾、そしてアルゼンチンなど十の国と

地域から五十人余りのボランティアが駆けつけ、七月八日に被災地に集合して配付の準備にあたった。

七月九日、被災した中華系実業家への配付に続き、七月十日にはカタルーニャ聖母教会で配付活動が行われた。カウンセラーである、地元ボランティアのモンサさんは、より多くの人にボランティアへの参加を促すために、配付手順を説明したビデオを作成しただけでなく、段ボールでプレートを作り、関連書類に被災者が署名する欄を示し、地元ボランティアが配付手順に慣れるよう手助けをした。

テレサさんは、水害で家具が全部壊れたが、九十歳近い両親も、家が損壊したため、一緒に暮らすことになった。建築士の彼女は、慈済が支給した買い物カードが両親の三カ月分の生活費になり、自分も他の慈善団体の支援を受けているので、少しずつ家庭の再建が進んでおり、とても感謝していると言った。

或るお婆さんは、買い物カードを受け取って教会を出た時、広場でプレゼントを配付している慈済人の姿を見て、再び涙を流した。災害から十カ月経った今でも、被災した人たちは、言い尽くせない

い多くの重い感情を心に抱えており、彼らは悲しみを脇に置いて前に進み、新しい生活をしていくしかないことを知って、ボランティアたちも感極まった。

ウティエルの町にある数百年の歴史を持つ聖母被昇天教会が、物資配付の会場になった。日曜日のミサの時と同じように、クリストバル神父は、慎重に六本の大きな白い蠟燭に火を灯し、厳肅さと神聖さを象徴しながら、慈済による物資配付に祝福を与えてくれた。

慈済基金会宗教処欧・米・アフリカ会務室の呂宗翰（リユー・ジオンハン）室



長が、慈済を代表して挨拶し、「台湾の仏教団体がスペインのカトリック教会で物資の配付を実施できたことは、宗教が融合した美しい奇跡であり、また今の世界が最も必要としている大愛精神です」と述べた。「慈済人が来るのが遅くなつて申し訳ありません。私たちは皆さんを支援するために、努力してきました。最も感謝したのは、多くの地元ボランティアの皆さんの手伝いです。皆さんが

買い物カードを配付した会場で、地元スペインのボランティアは、第一線で役割を担って同胞に奉仕した。チバにある教会で、地元ボランティアが両手を添えて買い物カードを渡していた。（撮影・王素真）

いたからこそ、今日の配付は円満に終了できました！」。神父は、『新約聖書・ルカによる福音書』にある「善きサマリヤ人」のたとえ話を引用し、「隣人を自分のように愛しなさい」という一節の真意を説き、遠方から慈済ボランティアが来たことに深く感動したと言った。そして住民に、慈済ボランティアの「不請の師」精神を学ぶよう励ました。

慈済人が調査を始めた時からずっと協力してくれた地元の中華系実業家の陳耀明（チェン・ヤオミン）さんは、配付活動の終盤、住民がボランティアの導きで互いに手を繋いで、皆で『家族』と言う

慈済の歌に合わせて、しなやかな手つきで手語を披露した時、会場は神聖で温かい雰囲気包まれ、最後に大きな拍手が響き渡った瞬間、今までの苦労が価値あるものになった、と語った。

被災地には常設の慈済連絡所はなく、ボランティアたちは異国で言い尽くせない苦労はあるが、パイポルタの若いお母さんの、「世界から私たちが忘れられた時、慈済が依然として私たちの苦しみを心配してくれたことに感謝します」という言葉を聞いた時、あらゆる苦労が消えた。（資料の提供・王素真、潘静涵）

（慈済月刊七〇五期より）



町村	配付世帯数
ピカーニャ Picanya	1,507 世帯
パイポルタ Paiporta	890 世帯
ウティエル Utiel	222 世帯
カタルーニャ Catarroja	205 世帯
チバ Chiva	173 世帯
ベネトゥッセル Benetússer	47 世帯

合計 **3,044** 世帯

スペインの洪水被害 慈済の支援

背景

2024 年 10 月 29 日から 30 日にかけて、スペイン東部で豪雨による鉄砲水が発生し、200 人以上が亡くなった。これは、スペインでは 1996 年以降、ヨーロッパでは 1967 年以降最悪の洪水被害である。

原因

DANA はこの地域では秋によく見られる特殊な気象現象で、上空の寒気団と地中海の暖かい気流が交差することによって、激しい対流を引き起こし、大雨をもたらす。気候変動により、この現象はより頻繁、より激しいものとなった。

被災地域

バレンシア州の被害が最も大きく、多くの河川が増水し、排水システムが機能しなくなり、道路が寸断され、建物が損壊し、停電と通信遮断が発生した。

州都バレンシアは二千年以上の歴史を有し、マドリードとバルセロナに次ぐスペイン第三の都市で、伝統的な火祭り（ラス・ファジャス）はユネスコ無形文化遺産に登録されている。

配付世帯の統計

- 7 月 9 日～ 15 日に計 7 回実施。
- 世帯人数によるカード額面：

1～2 人 | **600** ユーロ

3～4 人 | **900** ユーロ

5 人以上 | **1,200** ユーロ

菩薩が安らぐ時

◎文・釋徳侃／訳・済連

苦しむ衆生に心が痛み、奉仕の苦勞を厭わないのが、菩薩の無私の大愛です。

住民が平穩に暮らせれば、

慈濟人は安心する

八月十一日、基金会主任たちが慈善活動について報告しました。その際、潘機利（パン・ジリー）師兄、吳宗樺（ウー・ジオンフワ）師兄、李琇釧（リー・シユウツァン）師姉たちはオンラインで、台風ダナス被害における高雄の修繕チームの取り組みについて報告しました。上人は、

「自然災害は抗しがたいものです。ひとたび発生すれば、大規模な動員が必要となります。南部の慈濟人がタイムリーに支援してくれたことに感謝しています。炊き出しに始まって、緊急支援、そして現在の修繕作業に至るまで、本当に大変だったことでしょう。今年の夏は非常に暑く、特に南部は気温が高かったのですが、南部の慈濟人に加え、北部、中部からも慈濟人が投入してくれました。彼ら

は強い日差しの下で仕事をし、ひどく日焼けしました。画面からも、彼らの肌が日焼けして赤くなったり、黒ずんだりしているのが分かり、とても心が痛みました」と言いました。

台風十八号（ダナス）による突風で屋根が吹き飛ばされ、降り続く集中豪雨で被災世帯は更なる苦境に陥りました。基金会営建処のスタッフや請負業者の作業チーム、ボランティアたちは、七月十七日から嘉義・台南地区で被災した家屋の修繕を始めました。「皆さんの苦勞には心が痛みますが、人が多ければ力も大きくなり、プロジェクトはより早く完成する

ことができますし、村民が安心して暮らせれば、慈濟人も安心できるのです。これが菩薩の無私の大愛であり、衆生を苦しみから救うために投入しているのです」。また上人は、「慈誠の師兄たちがこのプロジェクトに投入しているだけでなく、委員の師姉たちも同行して、暑い日にも食欲が出るような食事を用意したり、いつでも水分やエネルギー補給をしたりできるように、皆の世話をしており、ボランティアたちは、修繕チームのメンバーの、日焼けして赤くなった顔や腕に軟膏を塗ったりしていました」と言いました。上人は、師兄・師姉たちが、被災者が





一日も早く元の生活に戻れるよう願う気持ちから、苦労を厭わず、心身を投入してくれていることに感謝しました。被災地には、独り暮らしの高齢者や病気を抱えた住民もあり、彼らは屋根が突風で飛ばされ、雨が降り続く苦境の中、無力を感じています。「考えてみてください。これほど多くの愛を携えた人が家に来て関心を寄せたり、修繕を手伝ったりしてくれなかったら、彼らはどうやって暮らしていけるのでしょうか。ですから、彼ら

被災後の修繕は屋根が重点だったが、住民が環境を回復できないことに気づき、予定外の奉仕を提供した。七股頂山里の或る家で、リレー式に廃棄物を運び出した。(撮影・黄筱哲)

は皆、慈済人を必要としているのです」。

「この世には仏や菩薩が必要です。仏陀はこの世の慈父のような存在です。先ほど、父の日も休まず、仕事を続けたと言っていました。が、それこそ仏法で言う『大慈悲の父』であり、大慈悲仏なのです。苦しみを抱える住民や独り暮らしの高齢者が、屋根のない家で安心して住めないことを忍びなく思い、強い日差しの下で作業を急いでいます。専門の作業員に連絡し、メンテナンスの人員を増やして、早く工事を完了させることで、皆が休めるようになることを願っています」。上人は

チームに対し、安全に気を配り、自分たちの健康に気を付け、互いに気遣うよう促しました。「あなたの方の苦労を忍びなく思いますが、私はとても敬服しており、大愛を発揮してこの世に幸福をもたらし、被災した住民が一日も早く、安心して暮らせるようにしてくれたことに、とても感謝しています」。

全てが自発的 奉仕と同時に感謝

今年、台湾は地震や台風、集中豪雨によって、一部の地域で災難が発生しまし

た。現地の慈済人が直ちに緊急支援を開始すると同時に、他の地方からの法縁者も応援に来ました。「これは、台湾の慈済人が長年培ってきた暗黙の了解であり、みんなで自発的に、被災地のニーズに対応しているの、安心して見ていられます」と上人が言いました。

「この世に私が愛さない人はなく、許せない人もいません。なぜなら、私が感謝しない人はいないため、許す必要のある人もいないのです。私は誰ともトラブルになったことはなく、誰もが私を助けてくれており、たとえ私を邪魔する人たちでも、私を助けてくれているのです。

ができ、人々がお互いに感謝し合うので、『ありがとうございます』という言葉で、愛のエネルギーは益々広がり、清浄無垢な大愛が人間（じんかん）を覆うようになります」。

上人は慈済人に、「皆さんに自分の人生を振り返るようになっているのは、自分の人生でこの世に貢献したことを思い出し、自分でそれを肯定し賞賛することですが、傲慢になってはいけません。そして、『真空妙有』という絶妙な仏法を手に入れなければなりません。私たちは世のために多くのことをしてきましたが、見

というのは、そのような人たちのおかげで、私はこの世のことを理解できるようになるからです。そして、私が困っている時に、助けに来てくれた人たちにはとても感謝しています。私に偏見を持つ人たちは、私に謙虚になるよう警告してくれています。傲慢にならず、絶えず謙虚に小さく、私の存在が見えず、目障りにならないようになるぐらい謙虚になるのです。そうすれば、逆に大愛を広めることができます、より多くの人が私たちのように、見返りを求めずに奉仕するだけでなく、感謝の気持ちを持つようになるのです。援助を受けた人も愛を奉仕すること

返りを求めず、何にも執着しないことが、『空』なのです。『空』があつてこそ、『妙有』があり、清浄な仏性に回帰することができますのです」と喚起を促しました。

「もし奉仕した後も、どうして相手は私にありがとうと言ってくれなかったのか、と気にするようであれば、感謝の気持ちを受け取ったとしても表面的なものになってしまい、見返りを求めた奉仕になり、妙法の領域には程遠いのです。愛を持って奉仕する時も、感謝の気持ちを表し、感謝の心があつてこそ、法悦を感じることができるようです」。(慈済月刊七〇七期より)

台湾 Taiwan

- 設立して80年になる台湾更生保護会は、慈済ボランティアの楊九如（ヤン・ジュウルー）さんを含む、10人の傑出した更生補導員を表彰した。彼は一度誤った人生に足を踏み入れたが、出所した後、人生をやり直し、この十数年間、刑務所や学校を訪れては講演をしてきた。彼の人生ストーリーが大愛劇場『九如一家人』として放映された。

- 慈済と花蓮県政府は、大愛福祉コミュニティビルの建設で合意した。「0403花蓮地震」被災者に、自宅再建中の仮住まいとして提供し、その後は公営住宅になる。2024年9月に起工し、2025年11月15日に入居が始まった。

ベトナム Vietnam

- 台風20号と21号が続けて9月と10月にベトナムを襲った。慈済は現地政

府の許可を得て、被災地で被災状況の視察を行い、10月19日にタイグエン省で1000袋の米と1000本の食用油を配付した。

- その後の寄り添い支援として、11月7日から9日までゲアン省の学校5校に1000人分の助学金を配付すると共に、一部の学生に学習用品を配付した。また、当省の20世帯に、一世帯当たり7000万ドン（約4万2千円）の建設費用を提供した。

- 引き続き被災したゲアン省の1000世帯とハティン省の800世帯には、冬季の配付を行う予定である。

インドネシア Indonesia

- 慈済第二教育志業パークが2024年9月26日に起工し、13カ月を経て、今年10月25日に集会所の上棟式が行われた。面積が10ヘクタールのパークには、体育館、プール、図書館、運動場、実験室、科学研究センター、人文教育教室などがあり、2026年4月末に竣工し、7月から幼稚園と小学

校の生徒を募集する予定である。

タイ Thailand

●昨年、台風11号（ヤギ）で甚大な被害に見舞われた北部のチェンマイとチェンライの2県では、慈済が緊急支援した後、恒久住宅の支援建設を開始した。一年後、チェンマイ県メーアイ郡タートン町パータイ村で10戸の大愛住宅が引き渡され、メーサロン村では6戸の大愛住宅が11月に完成する予定である。（10月28日）

ニュージーランド New Zealand

●慈済はクライストチャーチのテ・アラタイ高校とセント・ジエームス小学校で、本年度の奨学金授与式を行った。9名の低所得家庭の優秀な生徒が奨学金を獲得し、テ・アラタイ高校の19名の生徒が制服の補助を受けた。この奨学金制度は2014年に設立されたものである。（10月28日）

ドミニカ共和国 Dominican

●10月末にハリケーン・メリッサがカリブ海に襲来し、ドミニカの南西部とバニ州ラスコリナスは、連日の大雨と河の上流の開発の影響で、大量の泥が215戸の住宅に流れ込み、家具や電化製品に大きな被害をもたらした。首都サントドミンゴのボランティアは10月30日に現地で視察を行った。現地の公立学校を退職した校長先生と研修中のボランティア、ヨセリンの案内で被災者リストを作成し、11月23日に配付が行われた。

グアテマラ Guatemala

●サンタバーバラ市は今年の雨季に溢れた湖水で酷く冠水し、市長は慈済に支援を求めた。ボランティアは10月19日に現地視察をした後、被災世帯のニーズに応じて、米と福慧ベッド及び645枚のトタン板を用意し、市政府と協力して96世帯に配付した。（11月2日）

ブラジル Brazil

- 11月初めに竜巻被害に遭った南部のパラナ州では、9割の家屋と公共施設が壊滅的な被害を受け、隣接するパラグアイの慈済ボランティアとブラジル消防局が協力して6トンの物資を寄付し、400世帯を支援した。

トルコ Türkiye

- 慈済トルコ連絡所はマンナハイ国際学校で、4日間にわたる19回の冬季配付活動を行った。シリア人ケア世帯以外に、トルコの貧困世帯に生活補助金を支給すると共に、飢えに苦しんでいるガザの人たちのために募金活動を行った。
(11月7日～10日)

フィリピン Philippines

- 11月4日、台風25号(カルマエギ)がセブ市に大きな被害をもたらした。ボランティアは11月8日から11日まで現地視察と同時に、被災後の感染症

治療のための抗生物質をタリザイ市など幾つかの衛生センターに届け、678世帯に食糧と生活物資を配付した。その後は被災者リストの入手状況と政府の再建計画によって、再び緊急祝福金または生活安定祝福金を1万世帯あまりに届ける予定である。

- 11月9日には台風26号(フォンウオン)が上陸し、オーロラ省で3万を超える人が避難した。ボランティアはティンガラン町を視察した後、600世帯を対象に25キロの米と生活物資を配付し、家屋が全壊した世帯には、家族構成に応じて、円換算で6万円から9万円の祝福金を配付した。

パキスタン Pakistan

- 今年6月の雨季に発生した大洪水被害に対して、慈済はケア基金会、マディナイスラム研究センター及びシルカット・ガーの3つの団体と協力し、パンジヤブ州とカイバル・パクトウンクワ州の7500世帯に食糧セットを配付した。
11月16日から5万人に届けることができた。

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈济医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈济病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈济病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880
大林慈济病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈济病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈济病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666
斗六慈济病院
640 雲林県斗六市雲林路2段248号
TEL: 886-5-5372000

慈济大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)
231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770
慈济人文志業センター
112 台北市立德路 8 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989000
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ニューヨーク支部
(New York)
TEL: 1-718-8880866

カナダ Vancouver
TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo
TEL: 55-11-55394091

イギリス London
TEL: 44-20-88699864

フランス Paris
TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg
TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam
TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg
TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna
携帯 : 43-6602053428

南アフリカ Gauteng
TEL: 27-11-4503365

中国蘇州
TEL: 86-512-80990980

香港

TEL: 852-28937166
フィリピン Manila
TEL: 63-2-7320001
タイ Bangkok
TEL: 66-2-3281161-3

ベトナム Hochiminh
TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL: 95-9-260032810

マレーシア
セランゴール支部 KL
TEL: 603-62563800
ペナン支部 Penang
TEL: 604-2281013

シンガポール
TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta
TEL: 62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota
TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman
TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul
TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL: 64-9-2716976

慈濟

2026年12月20日発行・348号

中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈济伝播人文志業基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路8号

編集 慈济日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈济基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

今月号は号数が2026年1月号になります。いつも前月に出版された月刊誌『慈济』の文章を翻訳しているので、実際に出版する月数を号数にしていました。今後は日本と台湾の習慣に合わせ、次の月数を号数にすることになりました。ご了承くださいますようお願い申し上げます。



明日の地球を守る 今こそ行動を！

マレーシアで2026年2月まで開催されている「グリーンアクション体験型展示会 (Green Action Experiential Exhibition)」は、マルチメディアによるインタラクティブ装置とインスタレーションアートで芸術創作を融合させ、来場者に環境保護の実践について考えることを呼びかけている。

全長11メートルの巨大なクジラが堂々と頭を上げて、クアラルンプール静思堂の入口で来場者を迎え、中には1万本を超えるペットボトルで作られた「尽きない欲望」トンネルがある。この回収資源で作られた創意あふれる世界において、来場者は観客ではなく、地球の明日を左右する“主役”なのである。(撮影・黄勇雄)



慈濟日本サイト



慈濟ものがたり